

「関帝文献」出版の目的

―『関帝事蹟徵信編』光緒八年序重刊本を例として―

伊 藤 晋太郎

はじめに

三国蜀の関羽に対する崇拜は、遅くとも唐代に始まり、明清にいたって隆盛を極める⁽¹⁾。また、北宋以降、関羽に対する爵位の追贈も続いた。北宋の徽宗が「忠恵公」に追贈したのをはじめ、明の万暦年間には帝位に登り、清代になっても加封は続けられた⁽²⁾。さらに、神となった関羽を祀る関帝廟も各地に建立されていった。

関帝信仰の高まりと共に、元代以降、関羽／関帝の伝記や伝説、関羽／関帝に関する評論や詩詞などを収録した文献が数多く出版された。これらの文献を「関帝文献」と総称することにする。「関帝文献」の内容は多岐に渉り、文献によって、また時代によってそれぞれ異なっている⁽⁴⁾。

「関帝文献」出版の目的については、それぞれの文献の序や跋において語られることはいうまでもないが、編纂者のみならず、出資者も含めた出版に関わった人物の像を総合的にとらえることによって「関帝文献」の性格や出版の目的が見えてこよう。「関帝文献」の中には、巻頭または巻末に出版資金を提供したスポンサーの一覧を載せるものがある。代表的な「関帝文献」を集めた叢書である魯愚等編『関帝文献匯編』（国際文化出版公司、一九九五年）は八種の「関帝文献」を影印し

て収録するが、そのうち、清・盧湛輯『関帝聖蹟図誌全集』と清・周広業・崔心榴輯『関帝事蹟徵信編』の重刊本に重刊にあたって資金を拠出した者の一覧が掲載され、特に後者の一覧に名前のある人物や屋号についてはその素性を比較的明らかにしやすい。そこで、『関帝事蹟徵信編』重刊本の出版関係者の出身地や業種を分析することで、どのような人々がこの文献の重刊に携わっていたのか、その傾向や特徴を探りたい。それによって、「関帝文献」の出版目的の一端を探ることができよう。また、従来の「関帝文献」の出版事情とも比較すること、この『関帝事蹟徵信編』重刊本の特徴を浮き彫りにしていきたい。

一 侯邦典という人物

本稿で対象とするのは『関帝文献匯編』所収の『関帝事蹟徵信編』⁶光緒八年（一八八二）序重刊本（以下、光緒八年序刊本）である。光緒八年序刊本は、武清県（今の天津市武清区）の人である侯邦典が出版したものである。この侯邦典については『光緒順天府志』⁷に伝が見えるので、これに基づいてその生涯を見ておく。

『光緒順天府志』卷一百三「人物志十三」に記すところによれば、侯邦典は字を慎五という。臨榆県（今の河北省秦皇岛市東北）の訓導（県学教諭の輔佐）の官に就いたが、在任八か月で辞職して故郷に戻った。咸豊三年（一八五三）に太平天国軍が迫った時には、侯邦典は財産を集めて武清県の防御に当たり、アロー戦争の終盤、咸豊十年（一八六〇）にもイギリス軍や土匪から武清県を守った。また、同治六年（一八六七）に馬賊が乱をなした際にも、村の防衛に努めたという。同治八年（一八六九）には村の子弟のために義塾を設立している。

ただ、侯邦典は翌同治九年に卒したとも記されている。これはどういうことであろうか。もしそれが事実なら、彼が光緒八年序刊本を出版することはありえない。

光緒八年序刊本には侯邦典自ら著した序文があり、その中で光緒八年序刊本出版の顛末が記される。曰く、

（光緒）七年辛巳（一八八一）の秋、某は都に出て、友人のところへ、この書物（『関帝事蹟徵信編』）を読む機会を得て、ひそかに嘆息したものであった。……今あまねくその版木を探し求めたけれども、手に入れられなかった。そこで同志を集めて重刻し、関帝の事蹟を広めようと思う。……これも日頃の大願である。版木はすでに出来上がったので、謹んで序文を記す。その顛末は以上の如くである。時に光緒八年歲次壬午四月朔、武清侯邦典謹序。⁸⁾

また、同じく光緒八年序刊本に序を寄せている張瑞芳は次のように述べる。

慎五侯公は、日頃から善を楽しみ、老いてそれはいよいよ深いものになった。彼はつねづね一意専心に行ないを制している。とりわけ関聖帝君を称賛して学ぶことに勤しんでいる。たまたまこの書物（『関帝事蹟徵信編』）を読み、深く感じ入って敬慕の念を起した。そこで資金を集めて出版し、その伝記を広めようとした。そもそも関聖帝君の英霊はほろびないことによつて、本来尼山の至聖（孔子）が永遠であることと全く一致する。そしてこの文献だけが散逸（した資料）を網羅し、前聞を考証しており、後世の学者にこの書物を読ませ、その時代を論じさせるのは、その忠義の良心を奮い起こさせるからである。そうであるからこの書物が民衆を啓発指導することは、まことに四書五経と並び伝えるに堪える。そして侯公は光緒三年丁丑（一八七七）にすでに武英殿版の四書を翻刻している。今般この書物についてもまた休まず努めて全力で重刊の事業を担った。日頃から（関帝を）思慕する真心も、おおよそ見ることができるのである。そしてその功績はいったいどうして埋没させるべきであらうか。⁹⁾

「慎五侯公」とあるから、ここに見える「侯公」が『光緒順天府志』に記される侯邦典と同一人物であることは確かである。両者の序文には、侯邦典がどのようにして『関帝事蹟徵信編』と出会ったのか、どうしてそれを重刊しようと思ひ至った

のかについて具体的に述べられている。また、後者は侯邦典が光緒八年序刊本の前に武英殿版の四書も翻刻していることを伝える。よって、『光緒順天府志』にある侯邦典が同治九年に没したとする記載は誤りであろう。

以上から分かるように、侯邦典という人物は政情不安の清末期にあつて、故郷に外からの危機が迫れば自ら進んで防衛に当たり、平時には子弟の教育に努めた。郷土武清県のために尽くす地元の名士であつたようだ。武英殿版の四書を翻刻したのも自らの義塾で使うためだったのであろう。そして、関帝に対しても篤い信仰心を持ち、関帝に学んで自らの行ないを律していた。出版経験のある侯邦典が、自ら敬慕する関帝の事蹟を広めるための書物をおそらくは地域の人々ために重刊しようと企図するのは、ごく自然な成り行きであつたのだろう。

二 『関帝事蹟徵信編』光緒八年序重刊本の出資者

光緒八年序刊本の冒頭には「捐資姓氏」という出資者の一覧が掲載される。この「捐資姓氏」に見える出資者を分析すると、どのような人々がこの文献の重刊に携わつていたのか、その傾向や特徴を探りたい。まず、行論のための資料として、光緒八年序刊本の「捐資姓氏」から出資者名を以下に列举する。

義善堂振之氏劉文鐸	崇善堂朗臣氏劉焜	義和永記	榮興公記	育生堂沈宅	百善堂王宅	孫椿記	徐銘新			
益聚号	三義広記	永徳公記	三義徳記	少田氏陳俊	王芝園	永聚号	恒元号	文光楼	長興吉	
趙子欽	万発成	万成玉	羅興泰	同義永	松竹斎	恒盛号	詹煥文	信遠号	恒泰陞	三槐堂王
南苑槐房	豫泰全武清県城内	全盛長采育鎮	慶和湧戸部街	誠義堂下九百戸 ⁽¹⁰⁾	益成公前門外粮店	同和堆房通州東関				
源盛成前門外粮店	徳順永采育鎮	全順堂李武清県東馬房村	益泰全河西務	同成局通州東関	天寿堂前門外粮店	孝				

義堂東安門外大甜水井	孫庚利采育鎮	趙宅晾果廠	天聚緞店	黃德重阿拉善旗	永泰緞店後門外	俊古扇前門外
崑玉齋崇文門外	輔德堂三河張各莊	衡源号三河張各莊	京都德和永	孫椿記	德順号	天裕成
昇祥	永大正	晉洪泰	義興公緞店	濟生堂	鄭漢章椿樹胡同思德堂	高世恩吏部
食胡同	傅汝霖草廠三条胡同	陳鏞三里河	文茂信局李鉄拐斜街	恒泰号大蔣家衛衙皮局	聚盛合寓會成店	全泰盛寓會
成店	天德木廠東單牌樓路西	德茂号	喬中和武清縣西楊村 ^⑪	趙純河西務大龍莊 ^⑫	德隆号南蔡村	德星当
西太原府文水縣	德声当武清縣城內	陳卿雲南陳莊	魏發基山西汾州府汾陽縣	趙玉德	馬步清	德恒当北旺鎮
鎔豐潤縣魏家莊	石鐸良邑果各莊	石元同上	石亨同上	張振德同上	崔国璽張家屯	王增大柴草塢
黃心斗山東省	石景春良邑果各屯	王肇恩良邑大馬莊 ^⑬	黃文琳山東省	何培元衡邑焦汪村	羅文琳良邑石山村	百忍堂
通州白廟						

このほかに「無名氏」「隱名氏」が計七人見える。また、「孫椿記」が二度出てくるが、編集ミスによる重複なのか、同名の別の店なのかは不明。以下に二つの観点からこれらの出資者に分析を加えていく。

三 出資者の地域的傾向

まず目につくのは、侯邦典と同じ武清県の出資者である。「武清県」と明記される豫泰全・全順堂李・喬中和・德声当はもちろん、下九百戸・河西務・南蔡村・南陳莊・北旺鎮も武清県下の地名であるから、これらの地名が記される誠義堂・益泰全・趙純・德隆号・陳卿雲・德恒当も武清県の出資者である。

そして京師、すなわち北京からの出資者も多い。東安門・晾果廠・崇文門・椿樹胡同・草廠・（東）茶食胡同^⑭・三里河・李

鉄拐斜街・大蔣家衚衕はいずれも『光緒順天府志』卷十三「京師志十三」、または卷十四「京師志十四」に見える地名である。よって、孝義堂・趙宅・崑宝齋・鄭漢章・葉乃榮・周文・傅汝霖・陳鏞・文茂信局・恒泰号は北京からの出資者であることが分かる。また、「前門」「後門」はそれぞれ正陽門と地安門の別名である。よって、「前門外」と注記される益成公・源盛成・天寿堂・俊古齋、そして「後門外」と注記される永泰緞店も北京の出資者である。

武清県や北京の周辺からの出資者も目立つ。大興県からは南苑の三槐堂王、および采育鎮の全盛長・德順永・孫庚利、通州からは同和堆房・同成局、三河県からは輔德堂・衡源号、昌平州からは張家屯の崔国璽・崔榮が出資している。また、「良邑」は北京の西南にある良郷県のことである。良郷県の果各莊から石鐸・石元・石亨・張振德・石景春、大柴草塢から王増、大馬莊から王肇恩、石山村（不詳）から羅文琳が出資している。

この中で注目すべきは、通州や武清県の河西務・下九百戸・東馬房村・南蔡村・南陳莊・西楊村といった、北京から武清県を経て天津府に至る北運河沿いの地名が多く含まれる点である。やや離れているものの、大興県の采育鎮もこれに加えてよいだろう。この北運河の流域にはもともと水運を通して地域的なネットワークが形成されていたことが想定される。また、この北運河流域は、アロー戦争の時に英仏連合軍が北京に侵攻した際の進軍ルートでもある¹⁵。地域の防衛を通じて流域一帯に連帯感が生まれていたことも考えられ、特にイギリス軍から故郷を守った侯邦典の名声はこの地域に広まっていたであろう。侯邦典が『関帝事蹟徵信編』重刊のための資金を募った時、その声に応じた者がこの地域から多く出たことはうなずける。

そのほかでは山西省の出資者が注目に値する。山西省といえば、関帝信仰の普及に大きく与ったとされる山西商人が想起される¹⁷。特に魏発基の出身地である汾州府は山西商人を多く輩出した土地である。そもそも運河の大きな役割は都に物資を運ぶことであり、都に運ばれる塩や穀物は山西商人の扱う主要商品であった。北運河沿いの人々と山西商人の間に水運を通して関係が構築されていたことは十分考えられる。

四 出資者の業種

出資者は個人名で掲載されている場合もあれば、屋号で掲載されている場合もある。出資者の中にはその屋号や附された注から、その業種や営業地が分かるものがあり、ここではそれらを頼りにどのような業種が光緒八年序刊本に出資しているのか、その傾向や背景を探っていききたい。

まず注目したいのは「粮店」と注記される出資者で、益成公・源盛成・天寿堂がこれに当たる。「粮店」とは穀類をはじめとした食料品を扱う店であるが、天寿堂については舞台を持つ大きな料理屋だったらしい。⁽¹⁸⁾北京市芸術研究所・上海芸術研究所編著『中国京劇史』上巻には、清末から民国初めにかけて北京には各種の劇場が四十か所以上あったとして、天寿堂の名も挙げられている。⁽¹⁹⁾「前門外」にあったと記されるから、「捐資姓氏」に見える天寿堂と同一であろう。

この頃の北京の食糧業界は多くが山西人によって経営されており、源盛成は山西省臨汾・襄陵出身の油・塩・食糧を扱う商人が北京で設立したギルドに加盟していたことが、このギルドの会館である臨襄会館の「重修臨襄会館碑」(同治十二年「一八七三」六月建立)、および「臨襄会館施銀碑」(光緒十四年「一八八八」九月建立)から分かる。「臨襄会館施銀碑」には光緒八年序刊本に出資した恒盛号・信遠号の名も見え、彼らもこのギルドの加盟者であった。臨襄会館には関帝が祀られているから、彼ら山西出身の商人たちが光緒八年序刊本に出資したのもうなずける。⁽²¹⁾

山西商人の営業種目としては、よく知られる塩商や上記の穀物商のほか、絹織物商・運輸商・木材商・棉布商・典当商(質屋)⁽²²⁾が挙げられる。よって、「捐資姓氏」に見える出資者のうち、絹織物商である天聚緞店・永泰緞店・義興公緞店は山西商人の店である可能性があり、屋号から典当商と見られる德星当・德声当・德恒当も同様であろう。木材商の天徳木廠もその可能性が高い。⁽²³⁾

羅興泰は山西省絳州発祥のダイヤモンド工具店である。⁽²⁴⁾光緒八年序刊本が刊行された時期にはまだ山西にあったが、その

後、光緒二十年（一八九四）到北京に進出する。絳州は今の山西省運城市新絳県であり、関羽／関帝の故郷に近い。都で商品売るために山西商人との関係も深かったと考えられ、これらのつながりから光緒八年序刊本に出資することになったのである。

また、北京琉璃廠の出版関係者が関わっていることも注目⁽²⁵⁾に値する。文光楼は同治・光緒年間に琉璃廠で声望のあった書肆であり、章回小説の『小五義』を出版したことで知られる。もともとは江西の周氏によって経営されていたが、光緒二年（一八七六）に良郷県の石鎮の手に経営が移った。さらにその数年後、石鎮の従弟の石鐸に引き継がれている。この石鐸は「捐資姓氏」に個人としても「良邑果各莊」の石鐸として名を連ねている。さらに、同じ「良邑果各莊」の人とされる石姓の石元・石亨・石景春も同宗であろう。石景春は後に文光楼の経営を移譲される石景華の兄弟か従兄弟かもしれない。また、やはり「捐資姓氏」に見える何培元は文光楼の石鎮の弟子であり、光緒二十二年（一八九六）に自らの書肆である会文齋を開いている。彼は光緒八年序刊本に校閲者としても参加している。文光楼を経営した石氏とその縁者が光緒八年序刊本の出版に大きく与っていることが分かる。

三槐堂も琉璃廠の書肆である。もともとは江西人が咸豊年間に開業したのだが、数年後に王永年が引き継いだ。「南苑槐房」と注されるが、これは王氏の出身地かもしれない。

松竹斎は康熙十一年（一六七二）に創業した書画用の紙を扱う、いわゆる「南紙店」である。乾隆年間には比較的影響力を持つようになっていたという。現在でも書画や文房四宝などを扱う老舗として有名な榮宝齋の前身である。文光楼や三槐堂と同じく琉璃廠に店があった縁で光緒八年序刊本の出版に関わることになったと思われる。

侯邦典が光緒八年序刊本の出版にあたって、琉璃廠から資金を集められたのは、彼が以前に武英殿版の四書を翻刻していたことと大きく関係しているよう。出版に携わる彼が、やはり出版に関わる琉璃廠とコネクションを築いていたとしても不思議ではない。

その他の業種についていえば、慶和湧は武清県楊村の醸造所である。明末清初の創業で康熙・乾隆年間に最も繁盛したとい⁽²⁶⁾う。「戸部街」と注記されているのは、天津府城内の戸部街に店を構えていたということか。⁽²⁷⁾慶和湧が出資したのは地元の名士である侯邦典の影響力によるものであろう。

恒泰号は「大蔣家衛衙皮局」と注記されているから、正陽門外の大蔣家衛衙にあった皮革商と見られるが、北京の玉器商ギルドが光緒二十年（一八九四）十一月にその会館である長春会館に建てた「重修玉行長春会館之碑記」の碑陰にその名が見えている。⁽²⁸⁾そこに名がある以上は、玉器商ギルドに加わっていたようである。

文茂信局は北京の「李鉄拐斜街」にあった民信局（私設郵便局）。全泰盛も天津の民信局である。⁽²⁹⁾同和堆房は北運河沿いの通州にあった倉庫。いずれも商品・物資の取り引きや運送に欠かせない業種であり、これらの業種も光緒八年序刊本の出版に参画していることは、北京と天津を結ぶ北運河沿いのこの地域において、直接商品を売買する商人のみならず、交易に関わる幅広い業種が侯邦典の活動を支持していたことを示し、地域におけるネットワークの広さと深さをうかがわせる。

以上をまとめると、第一に、光緒八年序刊本の出版には、関帝信仰の普及に一定の役割を果たした山西商人や山西商人に係する業種が幅広く出資していることがうかがえる。明清に隆盛を極めた山西商人もアヘン戦争以後に上海等の諸港が開かれると、経済的地位を浙江財閥に奪われてその勢いが衰えるが、⁽³⁰⁾「関帝文献」出版の場においては依然その存在感を示していたようだ。このことは清末に至っても、山西商人が関帝信仰の中心にいたことを物語っている。あるいは「関帝文献」の出版という「善行」によって、山西商人の再興を願う気持ちを山西出身の関帝に託したのであろうか。

ただ、その一方で、侯邦典自身が持つ地縁や経歴が築き上げたネットワークも山西商人に匹敵する力を持っていたことが見て取れる。北運河という北京と天津を結ぶ交易のルートの中に位置する武清県の特殊な地理的条件が、北京や天津から出資者を集める上で有利に働いたであろうし、山西商人とのつながりも自ずとでき上がっていったのであろう。また、前述のように、故郷のために防衛に当たったり、義塾を設立したり、四書を翻刻したりした侯邦典の名声の大きさも出資金を集めやすく

し、光緒八年序刊本の出版を実現させた原動力となったに違いない。

さらに、光緒八年序刊本に出資した業種の中には、関帝を行業神としている業種も多い。李喬『中国行業神崇拜』によれば、「捐資姓氏」に見える業種のうち、皮革・絹織物・飲食（ここでは天寿堂）・典当が関帝を行業神とする。もちろん、塩商たる山西商人も関帝を行業神とする⁽³¹⁾。多くが山西商人の手がける業種であるから、これらが関帝を供奉するのは当然ともいえるが、関帝を行業神とする業種だからこそ、出資を呼びかけやすかったということもいえよう。

五 『関帝事蹟徵信編』光緒八年序重刊本の出版目的

以上をまとめれば、光緒八年序刊本は、侯邦典の地元である武清県を中心に、北京と天津を結ぶ北運河の流域と、関帝や山西商人の出身地である山西省から出版資金を集めており、その出資者は山西商人の関わる業種、および侯邦典の経歴と関係のある業種であった。出資者の地域的傾向から見ても、業種から見ても、侯邦典がその中心で圧倒的な存在感を示している。それは侯邦典が故郷の防衛や教育によって地域に貢献してきたことが大きく影響していたであろうことは上述した通りである。それでは、光緒八年序刊本出版に関わるかの特徴はどのように位置づけられるのだろうか。

「関帝文献」の中には「官」製というべき文献も多い。例えば、『漢前將軍関公祠志』⁽³²⁾を編纂した趙欽湯は当時浙江の左轄（左布政使）であったし（『漢前將軍関公祠志』の趙欽湯「重刻関志顛末」）、それを修訂した焦竑は翰林院修撰・東宮日講官等に就いたことがあった（『漢前將軍関公祠志』の焦竑自序）。『関聖陵廟紀略』⁽³³⁾は荊州知府の魏勳が当陽県学教諭の王禹書に編纂させたもの（『関聖陵廟紀略』の王禹書自序、および「修葺関聖陵廟姓氏」）。『関帝志』⁽³⁴⁾を編纂した張鎮は解州知州であった（『関帝志』の張鎮自序）。また、「関帝聖蹟図」⁽³⁵⁾に大きな影響を与えた「漢前將軍壯侯関聖帝君祖墓碑記」を著したのはやはり解州知州であった王朱旦であり、彼自身も『続関帝祠志』（一卷。康熙十七年（一六七八）刊）⁽³⁶⁾を編纂している。

特に明代には歴代の解州守が編んだ「関帝文献」が続々と出ている。万暦年間以前に出た「関帝文献」のうち、『義勇録』（張寧撰。成化年間〔一四六五～一四八七〕刊）・『義勇集』（任福撰。弘治二年〔一四八九〕刊）・『重訂関王義勇録』（楊巽撰。弘治年間〔一四八八～一五〇五〕刊）・『重訂義勇武安王集』（三冊。呂文南撰。隆慶元年〔一五六七〕刊）の編纂者はいずれも解州守である。明・呂柟『義勇武安王集序』にも、元・胡琦の『関王事蹟』（至大元年〔一三〇八〕刊）刊。「関帝文献」の嚆矢）を「国朝（明）の歴代の解郡守がまた数度増補して刊行している」とある。⁽³⁷⁾

このように「官」が「関帝文献」を編むのは多分に政治的な理由によるであろう。解州は関羽／関帝の故郷であり、当陽は関羽／関帝が難に遭った地である。いずれも有名な関帝廟を有しており、長官にとってその土地をうまく治めていくには信仰を集める関帝を尊重することは避けて通れないものであったろう。「関帝文献」からは離れた例になるが、明の官僚であった潘季馴は黄河の治水の任に当たった時、関帝の「顕聖」が起こったことで関帝を信仰するようになり、遂には関帝に封号を賜うよう朝廷に奏請するほどまでになった。潘季馴は赴任当初、関帝を祭祀するよう要請されたものの、儒教官僚の立場からこれを拒否したのだが、後に関帝の「顕聖」を目の当たりにして態度を改めたという。⁽³⁸⁾ これもおそらく関帝を信仰している態度を示した方が人心を得るのに有利であり、治水工事を順調に進められると判断したからであろう。解州守が「関帝文献」を出版したのも、これと同様に人心を収攬して治政を安定させる目的があったと考えられる。

さらに、山西商人は明清の朝廷にとって、財政・軍事のいずれにおいても切り離せない存在であった。国家財政の四分の一以上は山西商人からの塩税が占め、山西商人が破格の安さで輸送を請け負ってくれたからこそ遠征先に兵糧を運ぶことが可能であった。山西商人なしでは国家経営が成り立たなかったのである。山西商人も国家から保護を受けることで成長し、莫大な富を築いた。それゆえ両者は相互依存の関係にあった。

山西商人の営業種目の代表はよく知られるように塩商であるが、その中心地は両淮（今の江蘇省東部沿海一帯）であった。「関帝聖蹟図」を制作した孫百齡は、これを公刊しようとして淮陰をまわっていたという。塩商としてこの辺りで絶大な勢力

を持っていた山西商人から公刊のための出資を募ろうとしていたことは間違いない。そして両淮の人（淮安府桃源県の出身）である『関聖帝君聖蹟図誌全集』⁽³⁹⁾の編纂者の盧湛と出会う。彼も山西商人から資金を集めることを考えていただろう。両者がここで出会い、そして最終的に「関帝聖蹟図」を収録した『関聖帝君聖蹟図誌全集』を出版することになったのは決して偶然ではない。そして、「官」もそれに乗った。『関聖帝君聖蹟図誌全集』には河道総督の于成龍をはじめ両淮の水利・治水を担当する官吏や塩官が序文を寄せているほか、地方官も含め多くの官吏が出版に関わっている。ちなみに『関聖帝君聖蹟図誌全集』の嘉慶六年（一八〇一）序重刊本にも両淮塩運司知事や両淮候補塩運司経歴など十二人の塩官が参与している。塩の最大の生産地であった両淮の塩政に関わる官吏が『関聖帝君聖蹟図誌全集』の出版に参加したのは、やはり最大の塩商である山西商人との密接なつながりゆえであることは間違いない。これら「官」製の「関帝文献」は明らかに政治的目的から出版されている。

これに対し、光緒八年序刊本は「官」の関わりが薄い「関帝文献」である。そもそも『関帝事蹟徵信編』の編纂者である周広業と崔応榴からして、それぞれ拳人と諸生に過ぎない（ただし、周広業が拳人となるのは『関帝事蹟徵信編』初刊本刊行後の乾隆四十八年（一七八三）⁽⁴⁰⁾）。しかし、初刊本の場合は元提督湖南学政の盧文昭と山西汾州府事の雷注度が序文を寄せており、まだ「官」とのつながりはある。一方、光緒八年序刊本には素性が分かる範囲内では「官」の影は見えない。かろうじて侯邦典がかつて臨榆県の訓導をわずかに八か月務めた程度である。既存の「関帝文献」の重刊であるから一から編纂する必要はなく、初刊時よりはるかに容易であるとはいえ、清末には「民」の間で「官」とは無関係に自主的に「関帝文献」を刊行しようとする気運が生まれていたわけである⁽⁴¹⁾。それほど関帝信仰が人々の生活に根付いていたということであろう。だから、侯邦典は日頃から関帝を自らの理想として自らの行ないを律し、たまたま友人のところで読んだ『関帝事蹟徵信編』に感嘆してこれを重刊しようと志したのである。「官」との関わりがない以上、刊行の目的は政治的なものではない。それでは光緒八年序刊本の目的は何か。

まず、侯邦典自身が自序で言っているように、また、張瑞芳がやはり序文で『関帝事蹟徵信編』は「広く伝わっていないくても版木も残っていない。この書物を読もうとしても購入したり書き写したりするすべがないということがままあるのも、またこの世の遺憾なことである」と述べているように、『関帝事蹟徵信編』がなかなか手に入らなかった当時の事情がある。日頃から思慕する関帝の事蹟を「数年の精力を尽くし、調査・校訂し（竭數年之精力、參攷考訂）」（侯邦典自序）ている良著であれば、なおさらそれが普及していないことに齒がゆさを覚えるだろう。正確で詳細な関帝の事蹟を伝えなければならないと考えるのは自然である。これが第一の目的であろう。

筆者は以前、各「関帝文献」の分析を通じて、「関帝文献」は二つのグループに大別できることを指摘した。その二つのグループとは、関帝信仰に対して冷静な態度で編纂された史実に比較的忠実なものと、関帝に対する熱烈な信仰心をもって編纂され、関帝に関する言説をできるかぎり取り込んだものである。そして前者を「グループⅠ」、後者を「グループⅡ」とした。⁽⁴³⁾そして『関帝事蹟徵信編』は、「関帝文献」の中でも史実により忠実であろうと志向された「グループⅠ」に属する。「グループⅠ」の文献には、「本伝」篇（関羽／関帝の伝記）の史実化といい、関帝の手紙の収録のしかたといい、その構成といい、儒教を奉じる士大夫の価値観が強く出ている。侯邦典がかかる『関帝事蹟徵信編』に大きな感銘を受け、それを普及させようと考えたのは、侯邦典自身が同じ価値観を持っていたからではないか。何しろ彼も一時は訓導を務めた身であり、四書を翻刻してもいる。関帝は一般的には道教の神として認識され、清代には財神という性格が付与されると共に、関帝靈籤や道教善書の『関聖帝君覺世真經』などが流行していた。しかし、侯邦典は巷にあふれていた道教神としての関帝のイメージに疑問を抱いていたのだろう。だから、『関帝事蹟徵信編』を読んでそこに描かれた関帝像、そしてそのような関帝像を打ち出した編纂者に共鳴したのではなかったか。儒神としての関帝像を普及させること、これが第二の、そしてより重要な目的だったと考える。

『関帝事蹟徵信編』の「民」間における出版は、儒釈道の三教が混合的になっていた清代とはいえ、関帝を道教神から脱却

させ、儒神としての関帝を宣揚しようとする「民」における動きである。士大夫の価値観に基づいた関帝の歴史回帰の志向は、『漢前將軍関公祠志』や『関帝志』など（いずれも「グループⅠ」に属する）に見られるように、名や地位のある士大夫によって進められたが、清末になるとその志向は民間にまで浸透していたのである。「グループⅡ」のように俗説や道教的要素を持った「関帝文献」も多くあるが、それらも「孔子聖蹟図」を模倣した「関帝聖蹟図」を収録することに代表されるように儒教的な要素を強く持ち、「関帝文献」は全体にわたって儒教寄りである。かかる特徴を持つ「関帝文献」というものの存在は、道教神としての関帝理解に一石を投じるものであるといえよう。

註

- (1) 関帝信仰については様々な論考が発表されている。ここでは主なものを挙げるにとどむ。井上以智為「関羽祠廟の由来並に変遷」(『史林』二六・一・二、一九四一年)、原田正巳「関羽信仰の二三の要素について」(『東方宗教』第八・九合集号、一九五五年)、黄華節「関公の人格と神格」(『人文庫』台湾商務印書館、一九六七年)、金文京「三国演義の世界」(東方選書、東方書店、一九九三年、一四九―一五五頁。増補版(二〇一〇年)では一五四―一六〇頁。さらに増補版では二六七―二七〇頁において朝鮮半島における関帝信仰にも言及)、梅鍾錚「忠義春秋——関公崇拜与民族文化心理」(四川人民出版社、一九九四年)、洪淑苓「関公民間造型之研究——以関公伝説為重心的考察」(国立台湾大学出版委員会、一九九五年)、蔡東洲・文廷海「関羽崇拜研究」(巴蜀書社、二〇〇一年)、二階堂善弘「中国の神さま 神仙人気者列伝」(平凡社新書、平凡社、二〇〇二年、二一―四〇頁)、顏清洋「関公全伝」(台湾学生書局、二〇〇二年)、劉海燕「從民間到經典——関羽形象与関羽崇拜的生成演變史論」(上海三聯書店、二〇〇四年)、張志江「関公」(中国社会科学出版社、二〇〇八年)、胡小偉「関公崇拜溯源」上下冊(北岳文芸出版社、二〇〇九年)、渡邊義浩「関羽 神になった「三国志」の英雄」(筑摩選書、筑摩書房、二〇一一年)。
- (2) 関羽に対する爵位追贈の状況を一部示しておく。

北宋崇寧元年(一一〇二) 忠惠公

大觀二年(一一〇八) 武安王

南宋淳熙十四年(一一八七) 義勇武安英濟王

元天曆元年(一一三二) 顯靈義勇武安英濟王

明万曆四十二年(一六一四) 三界伏魔大帝神威遠震天尊関聖帝君

清代では順治九年(一六五二)に「忠義神武関聖大帝」に封じられたのを皮切りに、光緒五年(一八七九)まで加封が続き、最終的にその封号は「忠義神武靈佑仁勇威顯護国保民精誠綏靖翊贊宣德関聖大帝」と長いものになった。

- (3) 本稿では、歴史上の人物や『三国志演義』等文学の登場人物としての関羽を「関羽」、崇拜の対象となった神としての関羽を帝号追贈の前後を問わず「関帝」と呼称する。

- (4) 本伝・世系・翰墨・墳廟・遺跡・年表など。尚、「関帝文獻」に関する主な論考としては以下のものがある。注(1)所掲顔氏著書三〇六―三二〇・三五〇―三五三・四二―四四・五二五―五三二頁、拙稿「関羽文獻の本伝について」(『芸文研究』九三、二〇〇七年)、拙稿「関羽の手紙と単刀会——関羽文獻の本伝についての補説——」(狩野直禎先生傘寿記念 三国志論集 三国志学会、二〇〇八年)、拙稿「関羽文獻 中的関羽書信」(『明清小説研究』二〇一一年第一期)、拙稿「関帝文獻」における関帝のひげについて(『三国志研究』第十二号、二〇一七年)、拙稿「関帝文獻」の構成から見る編纂の目的(『中国古籍文化研究 稲畑耕一郎教授退休記念論集』東方書店、二〇一八年刊行予定に掲載予定)。

- (5) 「関帝文獻」の序文等に見える編纂者たちのスタンスについては、注(4)所掲拙稿「関羽文獻の本伝について」を参照されたい。

- (6) 三十卷、首一卷、末一卷。周広業・崔心榴輯。乾隆四十年(一七七五)初刊。

- (7) 周家楣・繆荃孫等纂。早稲田大学図書館所蔵光緒十五年(一八八九)跋刊本に拠った。

- (8) 辛巳秋、典客都門、在友人處、得讀是編、竊歎。……今遍覓其板、不得。因糾同志重刻、以廣其傳。……是亦平生之大願也。刻既竣、謹序。其顛末如此。時光緒八年歲次壬午四月朔、武清侯邦典謹序。

- (9) 慎五侯公、樂善性成、老而彌篤。其生平存心制行。尤以誦法聖帝為兢兢。偶讀是編、慨然興慕。爰釀金付梓、以廣其傳。夫以聖帝之英靈不泯、原與尼山至聖千古同符、而是書獨能網羅散軼、考證前聞、俾後之學者讀其書、論其世、有以激發其忠義之天良。然則是書之啓牖斯民、允堪與五經・四子之書並傳。而侯公於光緒丁丑、既摹刻殿板四書。茲於是編復汲汲然力任重刊。其生平嚮往之忱、亦大略可見矣。而其功有何容湮沒哉。

- (10) 原文は「下几百戸」に作るが、「光緒順天府志」卷二十八「地理志十」に「下九百戸」とあるのに従う。

- (11) 原文は「西陽村」に作るが、「光緒順天府志」卷二十八「地理志十」に「西楊村」とあるのに従う。

- (12) 原文は「汾陽府」に作るが、中国歴史大辞典編纂委員会『中国歴史大辞典』全二冊（上海辞書出版社、二〇〇〇年）に従って改めた。
- (13) 原文は「大馬村」に作るが、『光緒順天府志』巻二十八「地理志十」に「大馬莊」とあるのに従う。
- (14) 『光緒順天府志』巻十四「京師志十四」には崇文門外大街に「茶食衛衙」と見えるが、これは「東茶食胡同」を指す。翁立『北京的胡同』（北京燕山出版社、一九九二年）二五・二八一頁参照。
- (15) 張海鵬編著『中国近代史稿地圖集』（地圖出版社、一九八四年）二六頁参照。
- (16) 通州の朱兆発は単身で侵略軍に乗り込んで説得を試みたが、銃殺された（『光緒順天府志』巻一百三「人物志十三」）。
- (17) 閔帝信仰と山西商人の關係については、注（一）所掲金氏著書一四九・一五五頁（増補版「二〇一〇年」では一五四・一六〇頁）、注（一）所掲渡邊氏著書等を参照されたい。また、山西商人については、寺田隆信「山西商人の研究——明代における商人および商業資本——」（『東洋史研究叢刊二十五、東洋史研究会、一九七二年』、佐伯富『中国史研究』第二（『東洋史研究叢刊二十一之二、東洋史研究会、一九七二年』）の「二〇 清朝の興起と山西商人」、佐伯富「清代における山西商人」（『史林』六〇・一、一九七七年）等を参照。
- (18) 常人春・張衛東「喜慶堂会——旧京寿慶礼俗」（『鬼児爺老北京史地民俗叢書、学苑出版社、二〇〇一年』一二〇・一二二頁）。
- (19) 北京市芸術研究所・上海芸術研究所編著『中国京劇史』上巻（中国戲劇出版社、一九九〇年）一八九・一九〇頁。
- (20) 張建明・齊大之「話説京商（図文商諺本）」（中国商人謀略坊、中国工商聯合出版社、二〇〇六年）九三頁。
- (21) 臨襄会館やそのギルド、および会館の碑については、李喬「中国行業神崇拜」（中国本土文化叢書、中国華僑出版公司、一九九〇年）一三六・一三七頁、および佐伯有一・田仲一成編註『仁井田陞博士輯 北京工商ギルド資料集』（二）（『東洋学文獻センター叢刊第二五輯、東京大学東洋文化研究所附属東洋学文獻センター、一九七六年』一六七・一七〇・一七一頁を参照した）。
- (22) 注（一七）所掲寺田氏著書二四九頁。尚、同書は主に明代の山西商人について論じたものであるが、寺田氏によれば、明代における山西商人の活動は、「清代のそれと、決定的に相違するものではない」（二七二頁）という。
- (23) ちなみに天徳木廠は北京の建築業ギルドが光緒六年（一八八〇）八月にその会館である公輪子祠（魯班館）に建てた「重修仙師公輪祠碑記」の碑陰にその名が見える（佐伯有一・田仲一成編註『仁井田陞博士輯 北京工商ギルド資料集』（四）（『東洋学文獻センター叢刊第三〇輯、東京大学東洋文化研究所附属東洋学文獻センター、一九七九年』六七九頁）。
- (24) 羅興泰については、山西省政協《晋商史料全覽》編委会・運城市政協《晋商史料全覽・運城卷》編委会編『晋商史料全覽』運城卷（山西人民出版社、二〇〇六年）二七二・二七五頁を参照した。
- (25) 清末の琉璃廠の書肆等については、孫殿起輯『琉璃廠小志』（北京出版社、一九六二年）、胡金兆『百年琉璃廠』（百年文化中国叢書、当代中国出版社、二〇〇六年）に拠った。
- (26) 王合成「慶和湧白酒」（『天津檔案』二〇一三年第四期）に拠る。
- (27) 清・沈家本修、徐宗亮纂『天津府志』巻二十三「輿地五」所収の「天津府城図」によれば、戸部街は天津府城内の街巷である（『新修方志叢刊河北方志之一（台湾学生書局、一九六八年）』所収光緒二十五年（一八九九）刊本影印本に拠る）。
- (28) 佐伯有一・田仲一成編註『仁井田陞博士輯 北京工商ギルド資料集』（一）（『東洋学文獻センター叢刊第二三輯、東京大学東洋文化研究所附属東洋学文獻センター、一九七五年』一七頁）。
- (29) 吳昱「略論晚清民信局的興衰」（『西華大学学報』哲学社会科学版、二〇一二年第三期）参照。
- (30) 注（一七）所掲佐伯富『中国史研究』第二の「二〇 清朝の興起と山西商人」。
- (31) 注（二一）所掲李氏著書八三・四七五頁。
- (32) 九卷。趙欽湯撰、焦竑訂。本稿では『閔帝文獻匯編』所収の万曆三十一年（一六〇三）序重刊本を用いた。

- (33) 四卷、後統一巻。王禹書輯。康熙四十年（一七〇一）初刊（『関帝事蹟徵信編』巻三十「書略」に拠る）。本稿では『関帝文献匯編』所収の清代重刊本を用いた。
- (34) 四卷。張鎮輯。本稿では『関帝文献匯編』所収の乾隆二十一年（一七五六）序刊本を用いた。
- (35) 「関帝聖蹟図」とは、数十幅からなる図と、各図に附した説明の文字とによつて関帝（関羽）の生涯を表現したもので、関帝を孔子と並ぶ聖人とするために「孔子聖蹟図」（孔子の生涯を図によつて示し、それに対応する説明文や詩を附したもの）を模倣して制作されたものである。「関帝聖蹟図」や王朱旦「漢前將軍壯繆侯関帝君祖墓碑記」については、拙稿「関帝聖蹟図」と「孔子聖蹟図」（『林田愼之助博士傘寿記念 三國志論集』三國志学会、二〇一二年）、拙稿「関帝聖蹟図」の構成要素について」（『二松学舎大学東アジア学術総合研究所集刊』第四十三集、二〇一三年）、拙稿「関帝聖蹟図」と「三國志演義」（『三國志研究』第九号、二〇一四年）を参照されたい。
- (36) 「関帝事蹟徵信編」巻三十「書略」に拠る。以下同じ。
- (37) 國朝解郡守相繼者又増刻二三次。（『漢前將軍関公祠志』巻七「芸文志上」に拠る。）
- (38) 朝山明彦「明末に於ける関羽の治河顕霊」（『東方宗教』第百十一号、二〇〇八年）参照。尚、朝山氏は関帝の「治河顕霊」を目の当たりにした潘季馴が心から関帝を信仰するようになったと見ているようだが、おそらくそうではあるまい。
- (39) 五卷、首一卷。盧湛輯。康熙三十二年（一六九三）初刊。本稿では『関帝文献匯編』所収の光緒二年（一八七六）上海翼化堂重刊本を用いた。
- (40) 張揖之・沈起煒・劉德重主編『中国歴代人名大辞典』全三冊（上海古籍出版社、一九九九年）に拠る。
- (41) 「関帝帝君聖蹟図誌全集」には同治十三年（一八七四）の重刊本もあり、「同治十三年重刻捐資姓氏」に並ぶ出資者は光緒八年序刊本ほどには素性が明らかにしにくいものの、道士や書肆の名が見える。
- (42) 流傳未廣而板刻無存。往往有欲讀其書而無從購錄者、亦宇宙間一憾事也。
- (43) 注（4）所掲拙稿「関羽文献の本伝について」「関羽の手紙と單刀会——関羽文献の本伝についての補説——」「関於、関羽文献、中的関羽書信」「関帝文献」の構成から見る編纂の目的」参照。
- (44) 例えば、胡孚琛主編『中華道教大辞典』（中国社会科学出版社、一九九五年）には「関帝」（一四九九頁）・「関帝覺世真經」（二九一頁）・「関帝靈籤」（一五五二頁）などの項目が立てられており、野口鐵郎・田中文雄編『道教の神々と祭り』（あじあブックス、大修館書店、二〇〇四年）には二階堂善弘「関帝 英雄、万能の神となる」を収める（六二―七二頁）。